

映画『肉弾』と岡本喜八の美学

出席者 寺田 農 (俳優 東海大学文学部文芸創作学科特任教授)
 山根貞男 (映画評論家 文芸創作学科元教授)
 辻原 登 (作家 文芸創作学科特任教授)
 山城むつみ (文芸評論家 文芸創作学科教授)



第一回目を迎えた東海大学湘南フィルムフェスティバルが二〇一一年十二月三日に開かれた。二〇〇五年二月にこの世を去った、昭和の名監督・岡本喜八の自伝的戦争ドラマをめぐって、若き日に主人公を演じた寺田農教授と文芸創作学科の教授陣が、さまざまに語り合った。

自分たちの戦争を描く

辻原 このフィルムフェスティバルは十一回目ですが、今年には特に感慨深いものがあります。東海大学の文芸創作学科が創設されたときに、映画・演劇・評論部門の教授として山根貞男先生に来ていただきました。そして、山根先生の指導で、この湘南フィルムフェスティバルが始まったわけです。そして、寺田農先生には山根先生の後任として文芸創作学科の映画・演劇部門を担当していただき、この映画祭も引き継いでいただいています。

山根先生と寺田先生は長年の親友、僕とも長い付き合いで感想でしたね。それから、当時のことを少し話しますと、岡本喜八監督はこの作品の前の『日本のいちばん長い日』という映画で、終戦時の玉音放送を巡る政府や軍部の混乱を書き、その映画が大ヒットをしたわけです。ところが、自分たちにとつての終戦はこんなじゃない、自分たちの戦争を描きたいというので、ほぼ監督の自伝である、この『肉弾』のシナリオを一晩でお書きになったと聞いています。

合いです。また、主任教授の山城先生も今回の映画祭全体を指導してくれました。この四人で話を進めていきたいと思います。

最初に、『肉弾』は昭和四十三年、僕が東京に出て来た直後に封切られた映画でした。アートシアターギルド新宿文化劇場というところで上映され、上京してすぐ観に行った記憶があります。寺田先生、四十四年ぶりに自分の作品と再会してどんな感じですか？

寺田 久々にこういう大画面で観ますと、どつと疲れましたね。走っているシーンを観ただけで、よくあんなことができたなど。あいつも四十四年後にはこうなっちゃうのでありまして……(笑)。それが率直

山根 岡本喜八は戦中世代なんですけど、『日本の一番長い日』は太平洋戦争の終結を、天皇の戦争責任を回避した形で描いた映画だと言われ方を世間からさ

映画『肉弾』

岡本喜八監督 / 1968年 / ATG



太平洋戦争で日本の敗北が決定的になっていた昭和20年夏、肉弾特攻のために魚雷をくくりつけた洋上のドラム缶の中で待機し続ける“あいつ”(寺田農)は、内地でのさまざまなことを思い返していた。過酷な軍隊の訓練、親切な古本屋の老夫婦(笠智衆&北林谷栄)、そしてセーラー服の美しい少女うさぎ(大谷直子)のこと……。名匠・岡本喜八監督が、戦中派としての想いをコミカルに切なく描きあげた戦争青春映画の傑作。監督の代弁者でもある主人公のぼやきと嘆きと叫び、大谷直子の可憐さ、低予算を逆手にとったユニークなモノクロ映像テクニクの数々など、劇中に表れるすべての要素が、戦争に青春を奪われた者たちのやるせなさを醸し出す。

芸術祭賞、毎日映画コンクール監督賞／主演男優賞ほかを受賞している。製作：馬場和夫／監督・脚本：岡本喜八／撮影：村井博／音楽：佐藤勝／出演：寺田農・大谷直子・天本英世・笠智衆・北林谷栄ほか

(写真はDVDの表紙)